



だより



R5.10.17 Vol.22

泥団子

2年生の男の子が運動場から校長室の窓越しに「校長先生！泥団子づくりしよっ！」と誘いに来ました。「いいよ～！」砂場で一からレクチャーいただき、「あーそういや、そうやって作っていたよなあ」と昔々を思い出しました。

これまで何度も触れていますが、この経験が子供の量感や質感、触感を育てます。デジタル世界では育たない感覚です。もう少し書くと、ここで得た量感は、3年生理科の「ものの重さをしらべよう」の学習内容につながり、それが密度という概念につながっていきます。(おっと理科の先生っぽいですね 笑)

身体を使って、しっかり五感を働かせることが学習の基礎になります！たかが泥団子！されど泥団子！であります！

「人を呪わば穴二つ」

なにやら物騒な見出しですね。数年前、「鬼滅の刃」が国民的な漫画・アニメとして一世を風靡しました。そこまではないかもしれませんが「呪術廻戦」という漫画・アニメも人気ですね。人を呪ったり、恨んだりする感情が具現化して人に害をなすといった内容です。確か、鬼滅の刃にも世間の不条理への恨みや憤りから鬼になってしまった人間もいました。漫画の話ではありますが、それを描くのは人間です。やはり様々な負の感情は我々から切り離せないものなのでしょう。しかし見出しにも書きましたが、自身の負の感情は必ず自分も傷つけてしまうことを意識したいですね。仏教の世界では「因果応報」と言われます。とはいいながら、ぶっちゃけ「人の不幸は蜜の味」これも人間の正直な感情です。でもそんな負の感情だらけの子供たちを育てたいのか？と自問すれば答えは明らかでしょう。子供は大人の鏡です。指導の前に自分自身を振り返ることも大切だと戒めています。

四方山話令和5年度 ver. 其の二十二(言霊)

日本では古来、「言葉は霊力を持つ」という考え方があります。(あ、決して、おかしい勧誘・靈感商法の類の話ではありません…笑)まあ、霊力とまでは言いませんが、心がけたい言葉ってものはある気がします。

毎回、この便りで偉そうなことを書いていますが、私は元来、非常に臆病で自分が経験したことのないもの(例えば、初めての場所や仕事の役割等)に対して不安がいっぱいになる性質です。思考もどちらかと言えばネガティブ。何事も前向きに捉え、動くことのできる人が羨ましくてたまりません。と羨ましがっていても何も解決しませんので、何かに挑戦したり、物事の捉え方についての書籍を当たったり…と日々、もがいております。

そんな中で出会った一冊の本について。(受け売りになりますが…)その言葉を常に口にするのを心がけていると、実際に脳はそのような判断をし始めるのだそうです。いくつか紹介します。

「○ しょうがない ○ そういうこともある ○ それはそれとして」

「やれることはやったんだ！しょうがない」「スマホ落としちゃった。そういうこともある。次はストラップつけよう。」「なんであんなこと言われたいといけないんだ！それはそれとして、とりあえずご飯たべよ！」こんな感じでしょうか。

過去は変えられません。そこにこだわるのではなく、しょうがないと諦める。そういうこともあると否認から受容の意識に変える。ネガティブな意識を引きずるのではなく、それはそれとして意識を別のところに移す。

「そんな簡単な話ではない！」と感じますか？ただ、物事の捉え方は自分の思考の癖なので、ネガティブ思考を言葉の力を借りてポジティブ思考に変えようとする意識は育つ気がします。(ややこしくてすみません。)

タレントに出川哲郎さんっていますよね。ある番組で、出川さんがお世辞でもうまいとはいえない英語を駆使して、目的を達成するコーナーがありました。「英語はほとんどできない！それはそれとして」「考えていてもしょうがない。」「この人には通じなかった！そういうこともある。」そんな意識が溢れている気がします。そして、そうやってポジティブに動かれている方ってすごく魅力的じゃないですか？